

## 今日からはじめる！ 口腔乾燥症の臨床 ～この主訴にこのアプローチ

日立製作所日立横浜病院歯科口腔外科／品川 隆



B5判 208頁  
定価 5,250円  
(本体 5,000円＋税5%)  
医歯薬出版刊  
(2008年9月発行)

「口腔乾燥症」いわゆる「ドライマウス」について、私たち歯科医療従事者はあまり理解せず、放置してきたのではないのでしょうか。「口腔乾燥」という病態が見逃され、「不定愁訴」として片づけられている患者さんが巷にあふれているように思います。最近ではマスコミなどで、「ドライマウス」「口腔乾燥症」という言葉をよく耳にするようになりました。私たち歯科医師が、もっとこの分野の理解を深める必要があるのはいうまでもありませんが、同時に PMTC や専門的口腔ケアなどを実践しているプロフェッショナルな歯科衛生士にとっても「口腔乾燥症」は知っておくべき重要なテーマだと思います。

最近、「口腔と全身」の関連性を示唆する多くのエビデンスが報告され、歯科疾患の診断・治療において、口腔環境に関連する生体側のさまざまな因子を考慮する必要性が叫ばれています。たとえば、PMTC を行っても、個々人の日常的な口腔清掃方法だけでなく、生活習慣、遺伝的素因、服薬状況、疾病の罹患状況によってその効果は異なってくるはずです。「口腔乾燥症」も当然、口腔の衛生状態に関与する重要な因子であると考えられます。また、高齢者、障害者(児)、要介護者

などに施行される専門的口腔ケアにおいては、その病態に対応できるスキルが求められています。

かつて、私が大学の口腔外科で研修医をしていたころ、ドライマウスを訴える患者さんが来院すると、シェーグレン症候群以外は、人工唾液を処方するか、心療内科や精神科に紹介して終わることがほとんどでした。若い研修医にとっては、対応に苦慮する場面が多かったことを記憶しています。現在の治療法に関しては、本書に詳しく説明されていますが、シェーグレン症候群でないドライマウスに関して、原因に応じて多くの引き出しが用意されており、「このような成書が、もっと早くに欲しかった」と思う次第です。

本書は、予防歯科学(口腔衛生学)、摂食機能リハビリテーション学を専門とする二人の編者を筆頭に、各分野の第一人者が名を連ねており、基礎から臨床まで、特に現場で活かせるノウハウの数々が具体的に紹介されています。

コンセプトとして、「口腔乾燥症」は唾液分泌量の低下にとどまらず、粘膜保湿度低下や舌および顔面周囲の運動機能低下、生活習慣・食習慣などが原因となっているため、包括的な診断と治療が欠かせないということがあげられており、その考えに基づき、病態や治療法がまとめられています。特筆すべき点は、第5章でライフステージに応じた臨床的対応(症例)がわかりやすく説明され、要介護者・障害者に関しては、第6章で口腔乾燥症の予防的な視点からの具体的な対応策がまとめられていることです。よくある質問については第7章「Q & A」で詳細に解説され、興味深い「コラム」も随所にあり、歯科医師だけでなく、コメディカルスタッフが読んでもわかりやすい工夫がなされています。現在の口腔乾燥症の臨床の流れを知り、理解するうえで、ぜひお勧めしたい一冊です。